昭和二十八年八月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

慈光

（通巻第五十三号）

第五卷　第八號

目次

無力と自力と他力……花田正夫…（1）
大無量壽經講話……福島政雄…（7）
あゆみの跡……臼杵祖山…（11）

無力と自力と他力

花田正夫

敗戦後三年目の早春でありました。十四歳の時から僧籍に入られて、毎日何萬といふ念佛を相続して来られ、すでに御歳も七旬に達した方がお訪ね下され、痛烈肺腑にしむ眞剣な告白を承りました。

「私は六十年近く念佛を申し申して参りました。そしてきつと淨土へは正念を失はずして参れることと望みをかけて居りました。ところが大空襲をうけ、瞬時にして寺の四隣は火の海と化し、紅蓮の火焔の中に包まれた時、今度はもう生命はない、駄目だといふ破目に落ちましたら、心が乱れてしまひ、行先が眞暗になりました。

こんなはづではなかつたと種々と焦りましたが、微塵のひかりもなく、無惨にも長年の念佛生活が根底から崩れて了ひました。

それからと云ふものは、誰れに詐へるとことろもなく、或は佛前に独坐し、或は深夜に靜坐して層一層の念佛を申すのでありますが、ひびの入つた鐘同様で、私の念佛申しますに心にひびが入つて、称へても称へても一向に手ごたへがなくなり味氣ないことでめります。

誠に生れ難い人間に生れ、幸にも佛縁に惠まれ、念佛申させて頂くまでに育てられてすでに長年になります。それなのに、ほんたうに信ずることが出来ないで、空しく終つて行くのかと思ひますと断腸の思ひがいたします」

悲歎の淵にただずまれて、念佛の声も微かな御姿に、私自身の足下を照し出して下さつたことであります。

次に或、矢張り長年念佛を申し申して来られた師で医師の方であります。敗戦后数年目の秋の初めに御訪ね下さいまして切々とした懺悔を聞かされました。

『青年の頃から有縁の念佛の師にめぐりあひ、その方に導かれ励まされて、消長はありますが五十を過ぎ六十に近い年まで、佛法佛法でやつて参りました。

ところが今度長男の医学部を卒業した子が戦歿いたしました。そこで次男の高等学校から学徒出陣をして居りました子の帰還を待ちまして、医師の後継をしてくれるやうに頼みました、色々文句も云うて居りましたが兎に角医学の方に進みました。ところが一年餘いたしますと医学はどうしてもいやで、自分は画家として立ちたいと云ひ始め遂に学校を退学して了ひました。その後家を飛び出しまして進駐軍の仕事などして生活を立て、画家として進むと申して居ります。

子供はさう云ふ風になりましたのですが、その間父として私の心は大変なことでありました。長男の後継者の戦歿次男の親のもとを去つて行く姿、思ひあまりまして、つひに「こんな子なら生れねばよかつた、」とまで思ひつめました時、はつと気がつきましたのは、子が悪い、子が言ふことをきかぬと申して居る親自身が、こんな鬼心をしてゐたのか、鬼の親にして見れば、云ふことをきかぬ子位はまだやさしい!!。』あとは言葉も絶えて唯念佛ばかりでありました。そして示されましたのが

「そのままと聞くたびごとに涙哉」

の一句でありました。

私は数年前この御両人の告白を承り、爾来つねに想ひ浮べては、聖人の淨土和讃の冠頭に掲げて下さいました、有名な二首の和讃を渇仰申すのであります。

彌陀の名号となへつつ
信心まことにうるひとは
憶念の心つねにして
佛恩報ずるおもひあり。

誓願不思議をうたがひて
御名を称する往生は
宮殿のうちに五百歳
むなしくすぐとぞときたまふ。

同一念佛を申しながらも、誓願不思議を信ずるか疑ふかが分水嶺となつて、有碍か無碍かの大きなへだたりが出来るのであります。聖人がそこをことに憐れんで、信を勧め、疑ひを誡めて下さいました御親切といふものが一層身に深くしみとほるものがあります。

宮殿のうちに五百歳

幸にも人界に生をうけ、兔も角、順逆の両縁に催されて

念佛ひとつ、念佛にかぎるとまで信ずるのも大変なことであります。佛法はことに身体にわかるといふことが大切なのでありまして、念佛ひとつとなれば、昼夜に念佛を申すといふ実行がともなはねばなりません。さういふところまで導かれるといふこともすでになみ〳〵ならぬ御慈悲の催しであります。理論倒れになつて念佛も出ない人々とは雲泥の差であります。

然しその念佛の上に、誓願不思議が信ぜられてゐるかないかによつて、念佛の生活が一転するのであります。一つは他力自然の無碍の天地、善もほしからず、悪をもおそれなき、本願念佛の心光に照護せられ、他は、念佛申しても人我相覆うて、到るところにこはばつた念佛生活の障りが続くのであります。一つは念佛の中の生活であり、他は生活の中の念佛と申すことも出来ませう。

この疑心自力の念佛者の金の鎖でいましめられて宮殿の中に、三宝の慈悲から離れて長い間空しく月日を送らねばならないのでありますが、この点について、聖人が、要門の念佛者の九失と、真門の念佛者の四失を掲げて、念佛申す私共への鏡として下されてあります。元来狂人は狂を知りませぬ、異解におちてゐる間は、それがさうだと知れないで、飽迄も自分は正しい信を持つてゐると思ふのであります。古語にも「其の愚を知るものは大愚にあらず、其の惑を知るものは大惑にあらず」と申して居ります。間違ひを間違ひと気づいてゐる人は、遂には正しい道に帰るものでありますが。自分は正しいとばかり独りぎめにしてゐる間は最も危険な状態で居るのであります。さうしました時に、その自分を照して下さる鏡をよくよく氣をつけて拝読することが大切なことになるのであります。

要門の九失と眞門の四失

要門の念佛者とは、諸善萬行のひとつとして念佛を申してゐる人達であります。池山先生はそれを「弁慶の七つ道具のひとつとしての念佛」と申されました。斯様な念佛者に次の九つの障りがおこるのであります。

一、正念を缺いてゐるから雑多な縁によつて心が動乱する。
二、佛の本願と相應してゐない。
三、教と相違してゐる。
四、佛語に順じてゐない。
五、信の初一念が相続しないで間断する。
六、後念の相続が出来ない。
七、回向の心が眞実になれない。
八、貪欲や瞋恚の煩悩のために障へられる。
九、慚愧懺悔の心がおこらない。

一句一句、我共の身について省みさせて頂くべき鏡であります。

次に真門の念佛者とは、諸善萬行に心を走せてゐる人々も、その実行となります時、段々と多より一に、萬行から一行へと傾注して來るのは自然であります。禪宗の道元禪師は「坐禪」に始まり「坐禪」に終る方と申しても過言でありませぬ。日蓮宗では、唯お題目の一法にすべてをおさめて、お題目ひとつと勧められるのであります。

そのやうに、諸善萬行が念佛ひとつにおさまる、善本徳本の念佛、これひとつ、これにかぎると、そこに最高価値を認めて一心に念佛申すやうになるのであります。罪福を信じ善本をたのんで、念佛を徹底的に申し申してそれによつてたすかろうと志すのであります。

ここで非常に注意せねばなりませんことは、所謂眞宗といふ立場をもつて、自力の念佛をさけすむ人達が多いのであります。若しさうした心が存するなれば、それがそのまゝ自身は眞門の念佛にもなつてゐない証拠であります。唯概念の理解と感情の遊戯だけで未だ教が身についてゐないからであります。法門聞きがぢりの時代に多いので私自身思ひ当ることが多いのであります。

さて「念佛ひとつ」とまで育て上げられるといふことは大変に有難いことであります。そのことすら世に稀なことであります、然し自力の執心が残る限り次の四つの障りが横たはるのであります。

一、定散自力の心で専ら念佛申す者は、大慶喜心が獲られず、從つて佛恩を報ずる心がおこらない。
二、念佛申すについても他を軽んじるといふ慢心がおこり、外観は殊勝さうに見えても内心は名利ばかりうごめく
三、俺が、俺がの我執我慢の心が自然に覆うて、同行や善知識に親近しないで、まじり濁る縁に心ひかれて自障障他する。
四、大小の聖人や、一切の善人は、本願の念佛を、おのれの善根として、念佛をわがもの顔とするから、佛智をさとることも、信ずることも出来ず、阿彌陀佛が浄土を建立して下された御苦労の御目当が、自分一人の上にかかつてゐると受けとれないから、眞実の浄土に直ちに生れることも出来ない。

この様に真門の念佛者にのがれられぬ障碍といふものを挙げられて居ります。

法然親鸞の両聖人の会見

念佛申すまでに育てられた身の上について自力と他力と

いふ大切な問題があります。そこに自力から他力へとの転入が往生の大事を決定するのであります。これにはもとより一大事因縁の圓熟といふことが根本問題であります、一大事の因縁の悉くの円熟といふことなくしては永遠に開かれぬ扉であります。

さて私はここに吉水の禪房に法然上人を尋ねられた祖師の御心事を偲ぶのであります。

聖人の裏方、惠信尼公文の御書によりまして明かになりましたやうに、聖人は二十九歳の春まで叡山の常行三昧堂で、堂僧をして居られたのであります。阿彌陀佛を御安置申して念佛三昧を行じて居られたのであります。その間に源信僧都の往生要集や、善導大師の御書をすでに読誦して居られました。御和讃に「善導源信すすむとも」とか「本師源空いまさずば、このたび空しく過ぎなまし」と歎ぜられてゐる所からしても明らかなことであります。その聖人が叡山の生活を閉ぢて、遂に吉水に走られたのも、自力念佛の行詰りが根本の問題であつたのであります。聖人の三願転入の体験を学者によりますと、御流罪以后、尠くとも本典御述作までの間と見られる方もありますが、私は聖人の御自書「愚禿釈鸞、建仁辛酉の暦、雜行を捨てて本願に帰す」をそのまま信じて居ります。又元久二年に選択集を書写し真影を図画せられたことを特に「是れ専念正業の徳なり、是れ決定往生の徴なり、よつて悲喜の涙をおさへて由来の縁を註す」と本典末に満腔随喜の念に溢れた表白をせられて居ります。以上の二文から他力念佛への転入は、吉水の禪房において両聖人の会見以后、選択集書写の間に成就されてゐると私は信じて居ります。

それでは自力念佛の行き詰りが、法然上人の如何なる御導きでひらけたのかと申しますと、歎異妙二章で聖人御自らその領解を大切に私共に残して下されてゐるのであります。

親鸞においては「ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」と、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。

はるばる十餘ケ国のさかひるこえて聖人をおたづね申した関東の求道者、聞法を生命よりも大切にされた方々を前に聖人は、「念佛よりほかに往生の道は知りませぬ、若し学問的にききたいのなら奈良や叡山の立派な学者のところへ行きなさい。親鸞は、念佛が浄土に参れるたねやら地獄におちるたねやら、それさへも見分けのつかぬ愚者であります。また種々の行をはげんで見ましたが、一行として満足なことは出来ず、暗きに迷ふばかりであります。だから

法然上人にだまされて念佛して地獄におちても後悔するところはありません。もともと地獄は一定の身でありますから」と答へられてゐるのであります。

聖人は叡山で、念佛を申し申して、これでこそ必ず往生出来るといふ身のたしかさを得たかつたのでありますが、遂にそれが叶はなかつたのであります。ところが法然上人に遭はれて、たしかさは本願にあるので、たしかにならうとしてもどうしてもなれない者をこそ憐んで下さる本願であり念佛であつたと知らされ給うたことであります。たしかになれぬとたしかにしらされて、その者をこそ捨て給はぬまことを念佛の大悲に聞きとられたのであります。

それにつきまして極く最近、真宗寺院に生れられて長く教職に居られる方が御訪ね下され、「私は長い間学校の仕事を中心にして居りましたが、最近になりまして信仰といふ問題の大事さに驚ろき、有縁の念佛者を各地に訪ねて参りました。ところが念佛申し申して居りますと時に有難涙にかきくれることもあり、色々な経験をさせて貰ひましたが、それ等は皆咲いた下から散る花同様であり残るものは何一つありません。焦つては何かを作り、作つてはこはれ去るといふ状態でありました。ところが、この何一つ残らない、この駄目な私のための本願であると知らされまして、唯涙の外ありません、南無阿彌陀佛ひとつで事足りることであります」と眼を輝やかせて話して下さいました。

又岐阜県の方で行住坐臥に称名念佛して居られた方が御訪ね下さいまして、「私は念佛申し申して参りました。電車の中でも高声に申せといふ勧めを受けて居りましたので、時にはひどい目に遭うたこともあります。職場でも解職して了ふとまで言はれて来ました。それでも自分の後生は一大事でありますので続けて居りましたが、共に念佛申して居た方で、非常な体験も得られ、すでに先達にまでなられた人々がポツクリポツクリと信が崩れるといふ風になりました。そこで私はその方のやうになりたいと常に願つてゐたその方々が駄目になつて了ふので、これは大変である、この道では自分も亦その轍を辿る外ないとあちこちと求め求めて参りました。ところがこの念佛一行にも行きつまるより外ない私のための選択本願のただ念佛でありました」と非常な驚きを告白せられました。

斯様に自力の要門・真門より他力弘願の念佛の門がひらかれるのであります。ひとへに願力の不思議です。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

大無量壽經講話

福島政雄

（まへがき）法藏比丘が世自在王佛のみもとに詣で給うて、み佛の御德を讃仰せられ、その偈文を述べられたのであります。今日のお話は、それに続くのであります。――

扨て偈文を法藏比丘が說き終られて、世自在王佛に次のやうなことを申されるのであります。

「唯然なり。世尊、我無上正覺の心を発せり、願くは佛我が爲に広く經法を宜べたまへ。我当に修行して佛国の清淨莊厳、無量の妙土を攝取すべし。我をして世に於て速に正覺を成じ、諸の生死勤苦の本を拔かしめたまへ」

世尊よ、私は無上のさとりに到る心をおこしました。どうか私のために、さとりをひらく經法をお說き下さい。私は何処までも修行を続けまして、清らかで、おごそかであつて、かぎりのない国土を私のものにしたいと思ひます。この願をおこしましたから、正しいさとりをひらかせて頂き衆生のあらゆる苦しみの根本を拔き去る願を成就させて頂きますやうに、とお願ひ申すのであります。

さういたしますと世自在王佛は

「修行する所の如き莊厳佛土、汝自ら当に知るべし」

と答へられるのであります。このお答は深みのあるものであります。即ち、その佛土は自分がどうかうと敎へるわけにいかぬ、「汝自らまさにしるべし」自分で斯様な境界を知らねばならないと、世自在王佛は法藏比丘に自覺をうながされるのであります。

さういたしますと、法藏比丘は

「斯の義弘深にして我が境界に非ず、唯願はくば世尊広く為に諸佛如来の淨土の行を敷演したまへ。我此を聞き已りて当に說の如く修行し、所願を成滿すべし」

とお答へ申して居ります。そのことばは非常にひろく深くして、私自身の心ではつきり見定められるものではありません、私の心の及ばぬ深い世界であります。さうしたわけでありますから、どうか諸佛の淨土の出来ました行を敎へて下さい、それによりまして仰せ通りに修行して、願を成就したいと思ひます、と答へて居ります。

この言葉が深いと申しますのは、我々は自分で何か理想を考へ、その通りに行ひたいと願ひますが、自分の理想といふものは、自分の心や經驗から出たもので、限られた大きさであります。自分の解らぬ世界は無限であるのに、自分の思想や經驗は限られて居ります。自分のそれを離れて即ち自分の理想は駄目であるから、それより清い深い境界を求めたい、さうした願が「我が境界に非ず」といふ一句に含まれて居ります。自分の未だ知られぬ世界を取り入れて国土を建てたいといふことで、実に広大無辺な、無限の理想であります。

世自在王佛はここに比丘の心の深く高く明らかで、其の志願が広く深いことを知られて、次の様に說かれるのであります。

「譬へば大海の一人升量せんに、劫數を経歷せば、尙底を窮めて其の妙宝を得べきが如し。人至心精進に道を求めて止まざること有らば、かならず正に剋果すべし。何の願か得ざらん」

と励まされるのであります。大海の水は非常に大きいものでありますが、これを一人で量る、長年月続けてやると遂には水を汲みほして其の底にある宝を得るであらう。その様に、人がまごころをもつて求道してやまなければ、如何なる願も成就するであらう、とはげまされるのであります。

世自在王佛はかくて「広く二百一十億の諸佛の刹土、天人の善悪、国土の麤妙を說き、其の志願に応じて悉く現じて之を與ふ」即ち沢山の佛の国土や、そこに住む天人のよしあしや、粗雜や、微妙な姿を說き示されて、これをありありと見せて下さつたのであります。これは志の深く広い法藏比丘の心にこたへ給うて世自在王佛が說かれると、一切の諸佛の淨土がありありと見えて来たのであります。

時に比丘は佛の說法を聞き、その淨土を悉く見られて「無上殊勝の願を超発し、其の心寂靜にして志、所著無し一切世間よく及ぶものなし」となつて居ります。こよない願をおこされて、其の心はしづかで、何にも執着やるところが無いのであります。

一体「願」といふものはどういふことでありませうか。例へば大經にある願といふ意味と、我々の希望とか理想といふことの意味するものとの相違は何でありませうか。一般に希望とか理想と云ふのは、今はさうでないが行く行くは必ず実現されるだらうといふことから希望とか理想をもつのであります。比丘の願は普通では無理なことを自分の願として持つ、普通では実現されさうもないことを心の願として持つのが大經の願であります。又我々が希望とか理想とかを起しますと、心がふるいたちますが、比丘はこの願を発されて、寂靜、しづかな、おちつきの心となり、執

着がないのであります。ところが我々の理想や希望は執着が出来、色々の障りも出ますが、比丘はそれを離れて靜かな心になつて、願をみたして行かれます、さういふ比丘の行方には我々は全く及びもつかぬことであります。

次に「五劫を具足して莊厳佛国、清淨の行を思惟し攝取せり」とあります。

五劫思惟とあります、これはどういふことでありませうか。聖人は「彌陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんと思召し立ちける本願のかたぢけなさよ」と常に仰せられたと承つて居ります。

五劫思惟の願とは、私共が現におさまらぬ心、濁り狂うた煩悩の生命に、ついて離れずにあるのであります。何か昔々に歴史的に法藏比丘が居られて、五劫の長い間思惟して、淨土を建立して下されて、そこに私共が迎へられるといふのでなしに、私の今の煩悩の生命、俗間の生活、おさまらぬ煩悩生活にひびいて来て、法藏比丘の五劫思惟の願心を感ずる、私の心の乱れるにつけても、莊厳佛国と清淨の行とを思惟し攝取して下さる御心が私とはなれて居ないことを感じますのであります。法藏が永遠の道を求めてやまぬ生命の真の動きは私を離れたものではありません、比丘の求道が私の煩悩の生命と結びついてゐるのであります

法藏比丘は今現に私のために、私の全生命をおさめ取つて新らしく出現しようとする生命の根本であります。さうでありますから、或学者の方は、法藏菩薩とは阿頼耶識であると云はれたさうですが、それでは私にはわかりません。今申しましたやうに、根本の道を含みもつた生命の芽萠えとして根本から湧き出ようとする根本の生命が、比丘の生命でありますから、私の煩悩についての比丘の五劫思惟であります。歴史的、神話的なものでなく、私の生命の上に五劫思惟を感ぜられる、求道の生命の根元であります。

次に、最初に驚き問ひ奉つた、そして默つて聽き入つて居りました阿難が口を開きまして、かの世自在王佛の御寿命はいくらでありますかと世尊に問ひ奉つて居ります。すると彼の佛の寿命は四十二劫であると答へられてあります。これにも何か深い思召がましますことでありませう。

時に法藏比丘は二百一十億の諸佛の妙土や、清淨の行をおさめとられて、世自在王佛に礼を申し上げて、申しますには

「世尊、我すでに莊厳佛土、清淨の行を攝取せり」

と。さう致しますと王佛は

「汝今説くべし、宜しく知るべし、是れ時なり。一切の大衆を発起悦可せしめん。菩薩聞き已らば、此の法を修行

し、縁りて無量の大願を滿足することを致さん」

と比丘に勧められるのであります。即ち比丘の心に取りいれた願の内容を説け、丁度今がその時である。その時とは、経の始めに「一時」といふことを申しましたが、この佛の説かれようとする心と、大衆の承りたいと云ふ心とがピタリと相一致した時であります。これが「是れ時なり」で丁度今が、その時であると王佛が勧められるのであります。比丘が攝取したものを説くと、一切の煩悩に迷ふあらゆる衆生の心がふるひたつ、大切な今その時である。法藏比丘の求道心が充分に湧き立ち、求道について国土を選び永遠の道が動き出ようとして、一切衆生の上、即ち私の生命の上に比丘の永遠の求道の生命が動いて参る。そのために比丘の説法が大切なのであります。比丘の説法を聞いた菩薩は、此の法を修行して、無量の大願を滿足するであらうと王佛が勧められるのであります。

そこで比丘は、王佛に向はれて「どうかよく御聽き取り下さい。これから私の願の通りを正しく申し上げませう」と答へられて、四十八願を説かれるのであります。

是処で大切なことは、法藏比丘、つまり、限りない求道の動き出ようとする比丘の生命は、私の求道の生命を奥底からわきおこらせる根本の生命であります。それを釈尊がお感じ下されて、一切衆生の上にひらかうとされてゐます。然もこれが大寂定三昧中の出來事でありますから問題は深いところにあると思ひます。

尚、法藏菩薩は阿頼耶識であると云ふ学者の方の説に就いて申上げますか、私共にはそれは解りません。

私は法隆寺の佐伯貌下から唯識学の講義をうけましたが阿頼耶識は根本の闇い生命の根元で、主観とか客観とかいふそのもう一つ根元であると聞きました。阿頼耶識はまだ迷ひの世界で、灰色であります。問題は灰色の阿頼耶識がひかり輝く大圓鏡智に転ずるのが大切であると聞いて居ります。然し阿頼耶識が転じて行く上の動力となるものは末那識であります。

末那識は我見我執の根源で、この末那識が転ずると阿頼耶識も転ずるので、この二つは生きた関係があります。

煩悩のいのちと永遠の求道とは離れたものではないといふことは、末那の我執の苦悩が我々を転ぜしめる動力となる、このやうにも考へられますが、唯識は人間の生命の説明であります。大経は説明ではなく、我々の迷ひ苦しむものが、如何になるか、即ち比丘の生命を我々の生命の上に感ずるものであります。だから説明とは、そこがかけ離れてゐる感じを持ちます。四十八願なり、永劫の修行が、歴史的過去のものではなく、又単なる神話でもなく、今の私に生きてひびいて参るのであります。

これから四十八願になりますが、次回にいたしませう。

昭和二十七年　三月十六日。

あゆみの跡

臼杵祖山

信仰に骨折つて得るといへる如きもののあるべき理なし若しこれありといはば断じて正信にあらず。

それ位の心懸けにては、徹底せる信仰には達せられずなどの曲言を構へて行者を惑はすものあり、あさましきことなり。

すでに聞き得たりといふは増益のあやまりなり。いまだ聞き得ずといふ捐減のあやまりなり。若しあやまりし増益捐減の二辺にかからば由々しき一大事なり。

聞と云ひ、信と云ひ、不聞と云ひ、不信と云ひ、ともに容観的指示の教化語なり、言句にしばられて眞面目を遺失する愚を学ぶなかれ。

聞者は自ら聞を知らず、信者ば自ら信を知らず。その然ることの眞実を知らば、聞不聞、信不信、倶に拘泥すべからず。

徒らに聞信の得を説き、不聞不信の失をさとすとも、いはゆる増益、捐減の二辺を断ぜざれば、たとひ聞信といふも尚且つ一辺のあやまりに堕すべし。

聞信に用事なしとは過言に似たり。されど請ふ、視よ、名人は剣に用事あらしめずして敵を降す。若し名人ならば利剣にまれ、棍棒にまれ、持つものとして、ことごとく利剣ならざるものなし。切るぞ打つぞは威喝の言葉なり。切らずして切る、打たずして打つ、これ名人の手際なり。

聞けと云ひ、信ぜよといひ、倶にいはゆる樂説無碍の言句なり。言句にまどはされて急所をあやまることなかれ。

非本願たる眞門さへ難思往生といへるにあらずや。況んや王本願たる弘願門、難思議往生においておや。聞や信やの分別あらば、真の難思議往生にあらざるべし。

真の難思議往生には、聞よし、信よし、不聞よし、不信よし、このままなり、これぞ絶対難思議なり。

この絶対の難思議を丸め込みたる一句重宝の名号は南無阿彌陀佛の外になし。

○

真に金剛堅固の信心を獲得せる人は、自から信心といふ執着なく、信心といふ自覚までも無きなり。自覚などのなき所、これ真実の信心なり。

若し信心安心の自覚を持つといふことは、未だ佛凡一如の理に達せず、機法一体の源をきはめざるなり。

○

近頃は一も自覚、二も自覚、口を開けば自覚々々といふ。この自覚沙汰はひいて告白問題をひき起すに至る。

特に甚しきは信仰を強要して、大多数の人の面前に於て泣くが如く、笑ふが如く、殆んど狂態とまで思はるるほどに演劇的振舞をして、それに自ら得々然として優超感に意氣豪然たる態度、また聽衆の多数の人人は、これに渇仰の念を以て迎へるといふ狀況なり。

信仰を仮面とする虚飾的欺瞞もほどほどにこそと思はるるものあり。

○

本來信仰は無我なものなり。その無我の信仰を標幟として口をよそほひ、筆をかざるに至りては信仰沙汰もあられた様にあらず。

然るに世の総てのことは別として、もつとも真似目なるべき信仰も、口にまた筆に、虚栄、虚飾を本とせざるを得ざる時となれり。

微薄なる時の流れを追ふために、より以上に虚偽をなし虚飾に耽る心を徴発せしむる方法を講ずるを以て、人を釣り出す如き、実に悲惨の極なり。

これ全く信仰といふ美名を冠りて、徒らに邪路に踏みこましめるもものなり、戒慎すべく、恐懾すべき大事なり。

○

親の心を知らぬは子供の心なり。さりながら知らざれども、親の真実の慈悲心の外に在るにあらず。

病む子の苦しみよりも、護る親の心の悩みこそ重きものなり。

子の自ら病むことを知り得ざるだけ、それだけ親の心の悩みを重くするものなり。

親子は一体一如の理なれば、赤子の病むままに親の悩みなり。子の苦しむままに親の痛みなり。よくよく深重不可思議の因縁なり。

親は自己の心を我が子に知られざるも、尚ほ且つ看護に一身を委ね、一心を尽す、尽し尽して且つ尽し足らざるこ

となきやと慮り、而して自已を責めて、子の知らざるをとがむることなし。一体一如の妙心いよいよ尊重なり。

南無阿彌陀佛。

○

南無阿彌陀佛

芳墨難有拜見いたし候。貴契御病氣の由は先般脇観導芳契より拜承いたし、更に其上一度書面を送致せられたしとまでも同芳契より御申入れられ候得共、今日まで等閑に打ち過ぎ誠に慚謝の至りに御座候。

釈尊は有漏皆空と説き、また三界無安、猶如火宅と示したまはられたるによりても、三界誰一人として無病者なくことごとく大病人に御座候。

倶にひとしく病人にして、その病氣を自覚すると、せざるとに由るのみに候。

自覚せざるものは、無病息災なり、樂なりと、ますます顚倒妄見を増長し候。而して稍々自覚せるものは、病なり苦なりと、いよいよ消沈苦悩を深重いたし候。

惟ふに全く自覚せぢる顚倒妄見に比すれば、たとい小分たりとも自覚の端緒を得たるにとの勝れたるは無論に候。

然しながらその未だ究竟に体達し得せざれば自覚と申すも覚束なき儀に御座候。これによりて我等の心根として自覚の究竟に体達せらるべきや否や心細く覚え候。

果して然らば如何にしてか宜しかるべきぞなれば、唯南無阿彌陀佛にて事足り申候。その外に存じたること更にこれなく候。

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

一、仰せの如く血のしたたるほどの懺悔も起らず候。誠に御同様に候。斯様に尊き懺悔も起り候はばこそと思ひ浮べられ候こともあり候へども、また更に按じ候へば、尊き懺悔も起し得ざるあはれなるこそ誠に吾等の仕合に候。さればこそ如來絶対の御慈悲に遇ひたてまつるなりと存じ候。

三品の慚悔など申すことは聖き道を辿らせたまふ御方々の機にとりてのことに候。我等として及ぶべき術は全くこれ無く候。

真心徹到する人は金剛心なりければ

三品の慚悔する人と、等しと宗師はのたまへり

との仰せの尊く候。たとひ血は流れず、涙さへ出でず、極まれる荒凉無味なる我等に候。ここに如來廻向の信行はかの流血以上の、落涙以上の無相無心の慚悔の徳、自然におさまり候。決して決して御懸念なされまじく候。ただ〳〵南無阿彌陀佛にて事足り申候。

一、帰命までは落るばかりの心にて候様の状態にて云々の仰せは、小生一向不覚に候。如何なる解由によられたるこ

となるかを存ぜず候へども、左様なる沙汰は一向無用に候ただ御慈悲にて助けられ候を信ぜしめられたる外に何の所存もなく候。

帰命とはおちる機にて候か。またの仰せの如く、御助けは法体にこそあるといへること、ともに存知せず候。もし帰命にして落る機に候はば、無量寿佛の法は何処にましますべき。すでに南無阿彌陀佛、即ち帰命無量寿覚といふ、一体成就に候へば、機法のかけはなれたるはこれなく候。

仮りに言葉の矛盾を解かば、落るとは助かつたる反照に候。またたすかつたとは落ちるものの反影に候。落ると助かるとの二法、別体にてはこれなく候。

畢竟ずるに、我等はただ、如來の調理塩梅に御任せ申す外なく候。学者達、物知者の斯様の名言は、多くは却つて無垢の純信を穢し、無価の宝珠をこほち候。しかのみならず生死問題の一大事に対しては、斯様の名言は何等の要もなく候。

ただ〳〵南無阿彌陀佛にて事足り申し候。

南無阿彌陀佛　南無阿彌陀佛。

○

アサオキテ　ナモアミダブツ
ヨルイネテ　ナモアミダブツ
コレコソワガミノマモリホンゾン

ウスキ　ソザン

慧空師法語

凡そ宗旨を云はず、佛子、佛像を安置する者はその佛像をその家の主として、吾々は佛の家の堅子として給仕すと思ふべし。吾家の佛に仕ふるとは思ふべからず。在家なほ然り、いはんや寺院においておや。よくよく思ふべし。

白井先生近詠

木も草も鳥も岩秀も声あげてみ佛をほぐこの境かも

雨ぎらふ丘の墓原いざよへば啼きてかけゆく子規かも

裏山の木のまに歌ふ百鳥の声になぐさむ、この日頃かな

苔寺の林めぐりて行く水に　河鹿なくなり声のさやけさ

つぶら眼の黄色の照りのゑましくも　またたきにつつ去るか木兎

ひとのよにあれこし幸と彌陀佛の　御名を称ふるこの夕べかも

編集後記

お盆の月が参りました。目連尊者と亡き母との美しい物語が太鼓の音、踊りの声にひびいて参ります。骨と皮とにやつれて餓鬼の境界におちて無限の苦悩をうけて居ります母、それに食物を捧げてもそのまま火焔となつて、食ふことの出来ぬ母、目連尊者は悲泣雨涙して佛前に詣でるのであります。

「汝の孝順の心は如何に切実であつても、汝一人の力をもつてしては如何ともすることは出来ぬ。汝が七世の父母のために衆僧を供養し、十方の衆僧の威神力によつて母は救ひ上げられるであらう」と教へられるのであります。私はこのウラボン経を読み、歎異抄の四章の慈悲、五章の孝養、の問題をひとつながりのものとして味はふことであります。

今年はことに、戦後幾春秋各地に散在してそのままになつて居た御遺骨が迎へられました。かうした方々の生命にかけての御教を深く頂いてお盆を迎へさせて頂きませう。

○

△「大無量寿経講話」は法蔵菩薩の五劫思惟の御心を信嘗して御述べ下さいました。「譬如大海一人升量」と申されて居ります不可能の可能化、たすかるよすがなきを唯一のよすがとして下さる大悲を仰ぐことであります。

△「あゆみの跡」の臼杵先生の御遺稿は何とも申されぬ信味の深いものであります。不幸にも私はお目にかかることが出来なかつたのでありますが、先生が御発刊の個人雑誌自照を拝読し驚異して居るのであります。自然法爾章の講話は現在の京都の自照舎で発行されて居ります。但し先生の御言葉は何回も何回も繰り返して拝読して、岩間から清水が湧き出る趣の信味を頂けるものであります。一度読むと非常に感心するが、二度三度と読んでゐると底が見えてくる文章なども世聞にはあります、いや世間どころではない私自身が浅薄なものでさうしたことはか出來ませぬが、深山幽谷に入つて自然の美を無限に味ふ趣は、臼杵先生の餘歴から教へられることであります。これ彌陀佛の久遠い願海からの流出によることでありませう。

△「無力と自力と他力」は最近草庵に訪れて下さる方々に啓発されまして誌しました。最高価値の念佛から絶対価値の念佛への転入の有難さをしみじみと教へられましたのであります。

○

近刊書照会

◈**義山法語**　足利義山著。　定価五拾円。送、拾円。

◈**人類の平和について**　白井成允著。　定価百二拾円。送、拾円。

以上。京都市右京区山内御堂殿町。自照舎発売。振替京都六八四八。

◈**眞實の宗教**　羽溪了諦著。　定価百七十円。京都市中央局区内七条通烏丸あそか書林発行。

◈**かがやく大地**　足利淨圓著。　定価百円。送、拾円。

昭和二十八年八月十日　印刷
昭和二十八年八月十五日・発行　毎月一回十五日発行

定価　一部　十七円（郵税共）
　　　半年　百円（郵税共）
　　　一年分　二百円（郵税共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　富田匯

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千種印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番